

第51号

発効日：平成21年12月16日

発行者：医学部広報委員会

印刷：やまと印刷株式会社

弘前大学大学院医学研究科・医学部医学科広報紙

医学部ウォーカー

- 1面：高度救命救急センターカウントダウン
 - 2面：新任教授紹介
 - 3面：臨床医学入門実習について
 - 4面：アメリカ留学だより
 - 5～6面：テネシー大学及び三沢空軍病院への学生派遣
 - 7面：医学展をふり返って
 - 8面：アップルマラソン二連覇
- 題字 弘前大学長 遠藤正彦氏筆



高度救命救急センター…事業の大小にかかわらず、実行するにはまず「ヒト、モノ、カネ」の準備をしなければなりません。しかし、これにはぜひ「運」や

高度救命救急センター カウントダウン

附属病院長 花田 勝美

「勢い」も必要項目につけ加えたいものです。この度の、高度救命救急センターの設置はまさにこのことを思い起こさせる快挙でした。遠藤正彦学長の十年來の練りに練った設置構想と草の根運動は並大抵のものではありませんでした。そのドラマチックな展開の経緯は昨年発刊された「弘前市医師会報（第三二四号）生涯教育」に寄稿されたごとくです。特筆すべき着眼

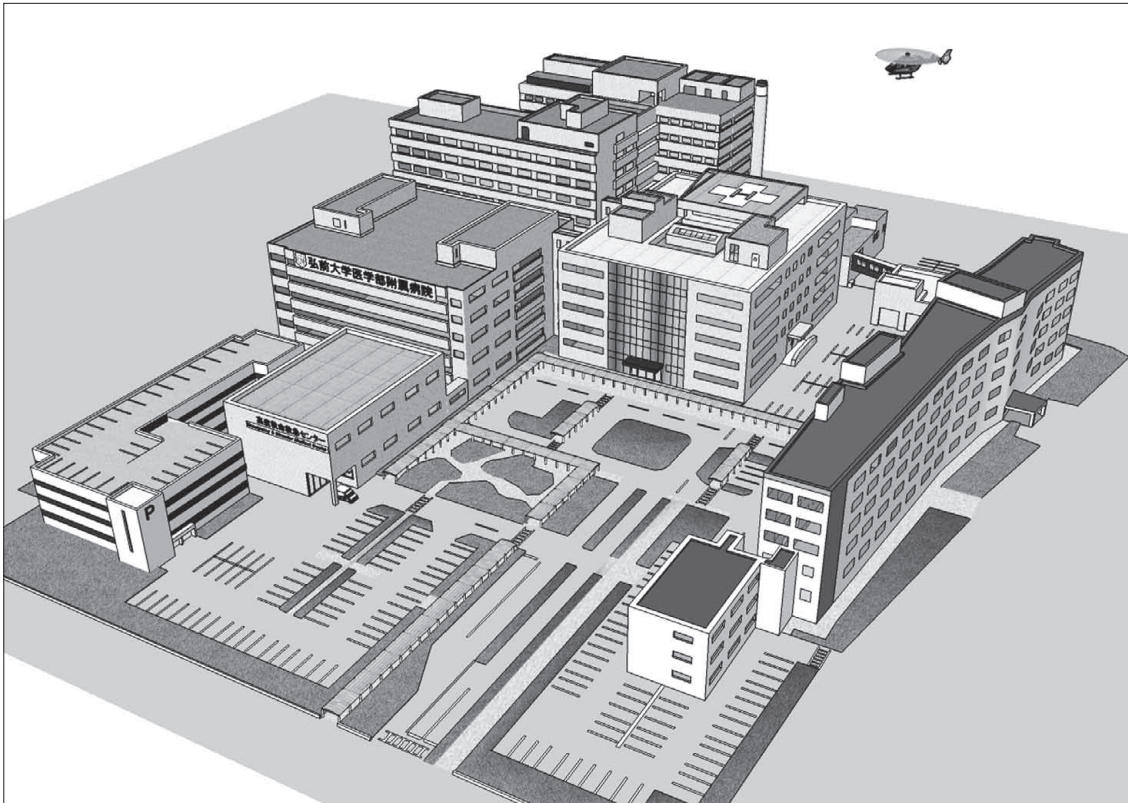
点は本県の特長性から被ばく医療と救命救急を掛け合わせたことにあります。これに共感された多くの支援者が学内はもとより、学外にも多数現れました。にもかかわらず、平成二十年度の大学からの概算要求では認められず、なお継続した努力が求められました。しかし、事態は一変するのです。原発事故の発生、救急患者の痛ましい事件が連続します。救命救急体制の整備を求める国民の声が次第に高まります。青森県は平成二十一年、五年ごとに出される県の保健医療計画に「弘前大学に高度救命救急センターの設置を図る」との文言を掲載しました。青森県から弘前大学に正式に高度救命救急センターの設置が要請されたのです。設置運動は公になったといえます。高度救命救急センター設置は附属病院の平成二十一年度概算要求に盛り込まれ、見事にリベンジを果たすことができました。救命救急センターに予算がついたのは弘前大学が初めてのこと、まさに千載一遇の好機を得ました。遠藤学長の「努力と強運」が弘前大学に「幸運」をもたらしました。確実に負債を背負うことになる救命救急の運営に対しては、その恩恵を受ける地域からの支援が不可欠です。そのため、遠藤学長、社会連携・情報

担当理事、財務・施設担当理事、佐藤敬医学研究科長が精力的に市町村の首長を訪ね、財政支援の要請を行いました。その結果、津軽医療圏八市町村プラス大館市が運営費の一部負担に理解を示してくれました。これに先立ち、タイミングよく地方財政再建促進特別措置法（地財法）が改正され、救急医療に対しては地方自治体も財政支援ができるようになっていたからです。さて、建物本体は本年度末の平成二十二年三月十二日に竣工します。現在、急ピッチで工事が進められています。総面積は二、三〇〇㎡で外来診療棟の約七分の一、地下一階地上二階の建物です。医療機器は三月中旬に搬入されます。モノの準備は終盤に向かいました。いずれの大学でも大変なのが実にヒトです。救命救急に参加いただけるスタッフの募集、なかなか、医師の確保です。本学においては、運営に必要な最小十四名の医師が各診療科々長先生の計らいのもとに驚く程早く集まってくれました。救急部を中心とした十四名の誇るべき救命救急医師団です。これまでの院内外からいただいたセンターへのご支援を思えば立ち上げに失敗は許されません。このスタッフを皆んなで支え、かつ、徐々に増やし、発展させていきます。

いものです。三十六名の看護師も無事に採用されそうであり、ヒトに關しても本院は幸運にも順調に進んでいます。

塘グラウンド方向からとなり、病院正面方向に飛び立ちます。想像しただけでもわくわくします。竣工予定（完成）は平成二十二年三月二十六日。ぜひ、本学生には母校の躍進を知ってもらい、参加し、この地で頑張つてほしいものです。

交通渋滞に対する市民の皆さんからの苦情は尋常ではありません。病院正面の広場に九十八台、立体駐車場に二百二十三台が収容できるのみで、来院者の数には対応できません。このような現状から、百台程度のスペースを地下駐車場に設けることが計画されています。これは、研究棟と附属病院を結ぶ地下通路にもなり、心配されている診療棟への導線が短くなります。新しいプロジェクトに期待してください。（平成21・10・22記）



東京医科大学人体病理学講座

主任教授に就任して

長尾 俊孝



弘前の皆様、ならびに弘前大学同窓会の皆様、ご無沙汰致しております。このたび、平成二十一年一月一日付けで東京医科大学人体病理学講座主任教授を拝命致しました。本誌面にてご挨拶の機会を頂き、広報委員会の諸先生方をはじめとする関係者の方々に心より感謝申し上げます。

私は大学入学まで千葉市で生まれ育ちました。平成三年に弘前大学医学部を卒業した後すぐに、当時医学部長の要職にあった近藤洋一郎教授が主宰されていた千葉大学医学部第二病理学教室に大学院生として進み、そこで肝細胞癌に関連した病理学的研究により学位を取得しました。大学院卒業後は、六年間の帝京大学医学部附属市原病院勤務を経て平成十三年からは東京医科大学に籍を置き、現在まで一貫して主に外科病理診断学を中心に遂行して参りました。また、東京医科大学在籍中には外科病理学の分野において世界有数のスタッフや設備を誇る米国 Mayo Clinic に留学する機会を得ました。

が移り、現在まで専らその臨床病理学的ならびに分子病理学的研究を行っております。具体的には、当教室にフアイルしてある多数例の唾液腺腫瘍からまれな腫瘍型を取り上げて、それらの免疫組織化学的、電顕的、および遺伝子的にみた腫瘍の成因、予後因子、鑑別診断を含めた臨床病理学的性質を明らかにしてきました。それと同時に、唾液腺腫瘍の新しい疾患単位や組織学的亜型の提唱も行ってきました。それらの成果が認められ、平成十五年には、フランスのリオン市にて開かれた頭頸部腫瘍の国際的な組織分類である WHO 分類の作成会議に本邦唯一の編集委員として招聘され参画致しました。唾液腺腫瘍は、病理組織像が極めて多彩で、臨床病理像が定まっていない腫瘍型が未だ多く、また、組織分類自体が未だ混沌としていて、病理学的に未開拓な分野の一つと言えます。

東京医科大学は、もうすぐ創立百周年を迎えようとする歴史ある大学で、キャンパスとしては東京都新宿区内に二か所、その他に茨城医療センターと八王子医療センターがあります。その中で、我々の講座は大学病院と共に西新宿キャンパス内にあります。大学周囲には都庁を含め四十階建以上の高層ビルが林立し、また、程近いところには、歌舞伎町があるなど、東京

都内でも一等地に位置した大変恵まれた環境にあります。病理学に関連した講座としては我々の講座の他に東大久保キャンパス内にある分子病理学講座が設置されています。これらは古くは東京帝国大学から当大学に移籍され大変ご高名な病理学者であられた緒方知三郎先生（幕末の蘭学者・緒方洪庵の孫、東京医科大学初代学長）の流れを汲む伝統ある教室です。

我々の人体病理学講座には助教以上のスタッフが九名（内病理専門医八名）在籍しており、大学の組織上では基礎医学系に属しながらも、全員が病院病理診断部との業務により、活動の拠点を病院内に置き、診療業務として病理組織診断（生検材料、外科手術材料、および術中迅速）、細胞診、および剖検を担当しています。当講座のスタッフ数は、全国的にみると一見恵まれていられるかと思われ、知れませんが、しかしながら年間の病理診断件数が、組織診断約一万五千件、細胞診約三万件と全国でも五指に入る多さで、それらを全例ダブルチェックしながらこなし、教育や研究といった他の業務を考え合わせると決して十分とは言えません。より正確で迅速な病理診断を実践し、臨床各科とのカンファレンスを充実させることで少しでも質の高い医療に貢献できるよう努力してゆきたいと考えています。

病理学を教育する目的は、主に疾病の基本的概念を理解させることにあります。そのためには、臨床的知識との融合が必要不可欠であり、講義や病理実習では講座の枠を超えた統合的思考能力を身に付けさせるように心掛けています。また、当講座には臨床実習として全員の学生に対して週三日間の履修が義務付けられ、毎年五〜六名の初期研修医が配属されますが、それ

弘前大学大学院医学研究科 公開講座開催

麻酔科学講座 教授 廣田 和美



菊池淳宏先生

弘前大学大学院医学研究科公開講座「緩和ケア」は、八月二十八日（金）の午後六時から午後八時まで、医学部コミュニケーションセンターで開催されました。附属病院麻酔科・講師の佐藤哲観先生による「緩和ケアとはなにか」、続いて神経科精神科・講師の菊池淳宏先生による「緩和ケアにおける精神科医療」、最後に放射線部・准教授の青木昌彦先生による「緩和的放射線治療の進め方」と題して講義が行われ、司会は医学研究科広報委員会委員の廣田和美が行



佐藤哲観先生

いました。佐藤先生の講義では、緩和医療の概論を分かりやすく説明していただきました。特に医療用麻薬使用への患者さんの不安を取り除くとともに、緩和医療が終末期医療を意味するのではなく、がん治療を行う上で最初から必要不可欠なものであることを説明し、質問も多数ありました。菊池先生の講義では、緩和ケアにおける精神科医の役割と必要性を実際の症例を提示しながら、分かりやすく説明していただきました。Lancet 誌などにも掲載されているように、がん患者

学生チューター辞令交付式

脳神経生理学講座 教授 上野 伸哉



十月一日に、学生チューター辞令交付式が行われた。佐藤敬学科長より、後期チュートリアル授業の第一及び第二クルールのチューター担当の辞令が、医学科六年の有志に手渡された。六年生学生チューターは、総合診療医学の加藤博之教授の指導の下、九月よりチュートリアル授業用シナリオの選択、シナリオ内容の下調べなどチューター担当の準備をし、実際のチュートリアル授業に備えており、三年生にも好評であった。チュートリアル教育に協力した六年生学生チューター諸君と、加藤教授に、ここに感謝いたします。



青木昌彦先生

さんへの身体的・精神的サポートのシステムが、がん患者さんにあまり認知されておらず、苦しまれている方が多い現状があり、菊池先生の講義は、その点を一般の方にも認知していただく良い機会になったのだと思います。最後に、青木先生の放射線療法に関

しては、一般の方々はなかなか今まで聴く機会が無かったと思いますので、非常に有用な情報だったと感じました。実際の質問も、治療効果に関する具体的なものが多く、質問のあった聴講者の方々の周囲でおそらく治療を以前にまたは現在受けられている方がいらっしやると推察されました。最終的な受講者数は九十九名と非常に多くの出席があり、一般の方々にとって関心の高いテーマだった事が窺えました。天候が良ければ百名を超えたのではないかと思います。講義後のアンケートの結果を見ても、どの講義にも受講者の皆さんは満足されたようでありました。

長編 研究 学部 医学 医

弘前大学の世界遺産

医学研究科長・医学部長 佐藤 敬



今年の十月七日付け東奥日報の、「未来技術遺産に弘大のX線装置―CTの元祖として評価」を読まれた人も多いでしょうが、この機会に、エックス線回転横断撮影装置について改めて紹介します。

去る七月八日に経済産業省の方が本学に来られ、いろいろな情報を頂くと同時に、この回転横断撮影装置を見て行かれました。残念ながら、この装置は、今は附属病院の片隅にカバーが掛けられた状態で保存されているので、存在を見て頂くにとどまりました。さらに残念なことに、「CTの元祖」という話は国内にも多数ある。」という趣旨のことを言っておられたので、当時から世界的に注目されていた事実や、CTの元祖としての位置付けは当事者が主張しているのみならず、第三者的視点からのものであるという事実、そしてなにより、開発された高橋信次先生（元 本学放射線医学講座教授）が、学士院賞恩賜賞、文化勲章など、国内では最高の荣誉に輝いている事実を、後にメール等でお知らせしました。

一九七九年にCTの開発

に対してノーベル生理学・医学賞が与えられた時、本学関係者のみならず、多くの人々は高橋先生が受賞されないことに疑問を持ちました。しかし、同じ年に、高橋先生は、田地文子、桑原武夫、小磯良平、丹下健三などと共に文化功労者の称号を受け、さらに一九八四年には文化勲章を受けておられます。残念ながら、CTに対してノーベル賞が与えられたことを契機に、高橋先生の実績にも世間の注目が集まったという図式のようにも見え、という指摘は「高橋信次伝」（岡田光治 著、医療科学社）にも出てきます。因みに、東奥日報社は、既に一九四九年の時点で高橋先生に対して東奥賞を授与しています。

今回、この装置が国立科学博物館の定める「次世代に引き継ぐべき未来技術遺産」に選ばれたことは、本学における研究実績が公に高く評価されたことであり、その紹介文にも、「高橋信次は一九五三年に世界に先駆けてエックス線回転横断撮影装置を試作し、世界で初めて人体の輪切り像を得ることに成功した。本機は：固定したX線管から出るX線で、被験者とフィルムを回転させながら撮影しようとしたもので、CTの先駆けとなり放射線診断に革新的変化をもたらした。」とあります。

高橋先生の実績について

にも紹介されており（弘前大学歴代学長告辞集）弘前大学出版会）、また、上に挙げた「高橋信次伝」も多くの人に読んで頂きたい一冊です（本学図書館医学部分館所蔵）。わが国の未来技術遺産の一つとなったエックス線回転横断撮影装置は、近く医学研究科臨床

研究棟の一角に展示することとしています。私たちは、本学の黎明期に芽生えたこの重要な実績を語り継ぎ、単に誇りとするのみではなく、私たちの励みとして、医学の教育研究に勤しんでいきたいとの思いを新たにしています。

新カリキュラムによる「臨床医学入門実習」について

歯科口腔外科学講座 教授 木村 博 人

医学科一年次学生を対象とした「臨床医学入門実習」は、別名アーリーエクスポージャー（EE）とも言われ、手元の資料では平成九年度からスタートしています。当初から後期が始まる直前に、学外の老人保健施設や知的障害者施設などを二日間、附属病院内の各診療科を二日間、計四日間、計四〜六日間の見学実習にわたって見学させ、新入生に対し医師を目指した動機を自覚させようという教育目標でした。また、平成十二年まではこれと並行して「臨床医学入門」という授業科目名で、一年次前期内科系と二年次前期外科系の講義が組まれていました。しかし、平成十三年からは「モデルコアカリキュラム」を取り入れた新カリキュラムの導入に伴い、講義科目は削除され、学外二〜三日間、院内二〜三日間、計四〜六日間の見学実習だけが残り、平成二十年度まで続いていました。多くの関係者が指摘してきたように、将来の大きな夢を抱いてきた新入生に対し、専門基礎医学・臨床医学の講義・実習に触れるまでの期間、そのモチベーションを持続させることは容易ではありません。その意味でこの実習の果たして来た役割と意義は大いに評価されるべきものでしたが、六年間の医学教育全体の教育目標とそれを実現するための方略としては些



か不確かな位置づけ

でもありました。そこで、平成二十一年度からスタートした新カリキュラムにおいては、一年次の演習・実習科目として新たに「臨床医学入門」という前期・後期合わせて四単位の授業科目を設け、その授業の一環として「入門実習」を実施することになった訳です。新カリキュラムについてはすでに本紙第四十九号にカリキュラム改正WG委員長中根明夫教授が紹介している所ですが、臨床医学入門は総合診療医学講座加藤博之教授の創意工夫により非常にユニークな講義内容が実施されています。

従って、本年の臨床医学入門実習は、九月二〜九日の期間で、これまでのように学外・院内合わせて五日間の見学実習を踏襲しました。更に、九月十一日の全体反省会に加えて、十月七日と十四日の二回に分けて、臨床医学入門の講義時間内でワークショップ授業と銘打って各班のまとめの発表会を開催しました。これまで、一日の反省会で院内看護部と学外施設の代

1 年次 科目

「臨床医学入門」で活躍する模擬患者

総合診療医学講座 教授 加藤 博 之

本学医学部医学科では平成二十一年度入学の一年次学生に対し、新しい教育科目「臨床医学入門」を開講している。本科目は一年生諸君に入学早期より医師になることの自覚を促し、「真のプロ意識」を身につけるための第一歩として位置づけられ、①積極的に自ら学ぶ姿勢の定着、②社会人としての基本的態度の修得（挨拶、言葉遣い、マナーなどを含む）、③他人に対する思いやりや共感力の醸成、④「医師不足問題」に対する当事者意識の涵養、⑤地元地域社会に対する理解、などを目指している。具体的には、「こんな医師になりたい」という自らの目標を作文や小グ



緊張した面持ちで、模擬患者と話す1年生

ループ学習で明確にすることをはじめ、地域医療に従事する医師の講話、本学の歴史、「津軽学」（白神、ねぶた、津軽弁など）の学習、コミュニケーション教育などのほか、従来から行っていた「アーリーエクスポージャー」も本教育の一環に組み入れた。本稿では、「臨床医学入門」の一環として十月末より始まったコミュニケーション教育「模擬患者さん」と話してみよう」について紹介したい。

模擬患者さん（Simulated Patient）あるいは Standardized Patient の略。SPさん（とも呼ばれる）とは、医学生に対する教育のために、「患者役」を買って出ってくれるボランティアの方であり、本学では従来から四年次末に行われているOSCEおよびPre-BSTの「医療面接」に参画して頂いている。五年次から Student Doctor として臨床実習のなかで実際の患者さんに接する学生にとって、模擬患者による医療面接のトレーニングは欠かすことのできないものである。今回、一年生への新科目「臨床医学入門」では、この模擬患者さんたちに協力頂き、コミュニケーションの演習の一環として、一年生が模擬患者さんたちと対話する実習を行った。具体的には、まずコミュニケーションの基本を講義した後、学生が模擬患者さんに対し、「自分はこんな医師になりたい」をテーマに五分間話をすることにした（写真）。自分の思いを上手に伝えるためには、話したい内容を要領よくまとめるだけではなく、挨拶や自己紹介、話すスピード、声の大きさ、言葉づかい、表情やしぐさなど、あらゆる要素を動員することが求められる。初対

（次ページへ続く）

(前ページより)
面の人の前で、これらを上
手に行うことは意外に難し
いことを、まず一年生たち
には体験して欲しい。そし
て更に、初診の患者さんは、
診察室の中で医師と相対し
たときに、同じ思いを抱い

アメリカ留学だより

附属病院産科婦人科 木村 秀 崇

二〇〇九年四月から一年
間の予定でアメリカ・シカゴ
の Rosalind Franklin University
of Medicine and Science/The
Chicago Medical School に留
学しております。私の所属
は Department of Clinical
Immunology で、主に生殖免
疫の分野、特に aGV-ATPase
を中心とした妊娠成立維持
機構に関する研究をしてい
ます。臨床的には習慣流産
患者、体外受精反復不成功
などの着床不全患者を対象
としており、患者は全米各
地から、患者血液検体にい
たっては世界各国から当研
究室に集まってきていま

す。当大学へは以前にも、
二〇〇五年に我が教室から
福井敦史先生が留学され、
習慣流産と着床不全におけ
る末梢血 NK 細胞と aGV-
ATPase の関与に関する研究に
勤しまれアメリカ
生殖免疫学会賞に輝く功
績を残された経緯があり、
Beaman 主任教授の指導の
もと、先生方の研究を踏襲
発展すべく日々奮闘してお
ります。
現在私の他にも、韓国、
インドからの留学生が多数
在籍しており、週に一回は
教授を含めた全スタッフで
の Lab Meeting が開かれ

ていることを想像できる医
学生になって欲しいと思
う。人間を相手にする医師
という仕事には、コミュニ
ケーション能力の習得が欠
かせないが、本実習がその
良きスタートとなることを
願っている。

ます。そこでは各人が一週
間分の研究報告をし、それ
に対して活発な議論がなさ
れ、またスタッフが適切な
指針を与えてくれたりもし
ます。研究に対する真摯な
姿勢、発想、着想といった
基本的な事から、実際の実
験手技にいたるまで、すべ
て範とすべきものであり毎
日が学習と吸収の連続で本
当に充実しております。

「シカゴ」といえば大都
会をイメージしますが、実
際のところ大学はシカゴダ
ウンタウンから北へ車で約
一時間ほどのノースシカゴ
市という街にあり、ここは
都会の喧噪から遠く離れた
閑静な自然あふれる美し
い街です。大学の全職員
はフォート、IC チップ付の
ネームカードを携帯してお
り、全施設への出入りの際
それがカードキーとして機
能し入室できる仕組みで、
弘前大学のオープンな研究
室から来た私にとってはさ
ながら映画の様なハイテク
なセキュリティであると驚
きました。
この寄稿にあたり、留学
便りということで、過分な
機会を与えていただしてい
る中で、私なりのアメリカ
生活の雑多な随想を少々。
アメリカには本当に芝生が

第20回 健脚を血管病から守る シンポジウム

胸部心臓血管外科科学講座 教授 福田 幾 夫

多く、個人の家に限らず、
ほとんどの建物の敷地は全
て専門の業者が手を入れて
いる芝で囲まれ、大きなア
メリカの住宅とあいまって
とても美しい街並みを形
作っています。また Park
District というのも、各自
治体が大人から子供までを
対象にした、さまざまなス
ポーツ、芸術、音楽など多
くのレクリエーションプロ
グラムを毎年提供してい
て、とりわけ子供にとって
は恵まれた自然の中でアフ
タースクールを健全に充実
して過ごせるよう、たくさ
んの大人が子どもたちのた
めに半ばボランティアで時
間を割いており、地域ぐる
みで青少年を養育している
印象をもちました。今回私
は、十二才、五才、十五ヶ
月の子供を同行させてお
り、アメリカの教育事情も
日本と異なると感じまし
た。時間割は毎日同じであ
り、また ESL とよばれる
英語が話せない子供のため
の英語の授業がある学校も
少なくありません。基本、
授業内容は先生に一任され
ており、一クラスは二十人
前後、教室は、みんなのも
のではなく、先生自身の
「自室」であるという考え
方の方です。つまりは、
休み時間に教室に残り自習
をするといったことや私物
を取りに無断で再入室する
といったことは許されてお
らず、六年生からは生徒が
授業毎に教科担当の先生の
部屋(教室)へ移動するス
タイルをとります。

シカゴには二つの季節
しかないと言われています。
す。十月から五月までの
冬、特にシカゴの寒さと風
は有名で寒いより痛いと言
現れます。その一方で六
月から八月までの三ヶ月間

健脚を血管病から守るシ
ンポジウムは、半年に一回
ずつ日本各地で開催される
公開シンポジウムであり、
平成二十一年十月に第二十
回が青森市で開催された。
今回は日本体育大学准教授
の山本博氏に「中年の星が
伝える健康の秘訣とは」と
いうタイトルで特別講演を
お願いした。山本氏は弘前
大学医学研究科の研究生で
もあり、今回の講演は本学
社会医学講座中重之教授
の特別なはからいで実現し
た。

山本氏は現在四十七歳、
アテネオリンピックで銀メ
ダルに輝き、「中年の星」
として一躍脚光を浴びた日
本を代表するアスリートで
ある。現在、大学の教職に
あつて学生の指導をしなが
ら、現役のアーチェリー選
手としても活躍中である。
講演前に少しお話を伺う機
会があつたが、その軀体は
鍛え上げられてがっちり
としており、陽に焼けた顔
からは柔和な笑顔がこぼれ

が夏で、とても快適で軽井
沢のような清々しい気候で
あり人々はジョギング、自
転車、ピクニック、日光浴
などを楽しんだり、フェス
ティバルやイベントも多く
短い夏を力一杯満喫してい
ます。現に私が今住んでい
るコミュニティは引退した
老人のための避暑の別荘群
で、そこの一軒を賃貸して
しまったらしく、夏しか隣
人がおりません。老人達も

が、会話の間に見せるまな
ざしには厳しい勝負師の目
を感じさせられた。
現在はテレビ出演等にも
多忙であり、講演は明快で
常に人の心をひきつけ続け
る面白さであつた。特にオ
リンピックのメダルをめぐ
る悲喜もごもは、栄光へ
の賞賛と失望による非難と
いう、一国を代表するアス
リートが経験する重圧をそ
のまま表す物語であつた。

山本氏は二十代で一九八四
年のロスアンゼルスオリン
ピックで銅メダルを受賞し
た。その後もソウル、バル
セロナ、アトランタオリン
ピックに連続して出場した
が、ソウルでの入賞の後
は、成績は振るわず、練習
を重ねても成績が上がらな
い日々が続いたという。「ま
ずは出場」を目指しての第
二十七回シドニー・オリン
ピック国内予選で敗退し、
その時にはしばらくの間
アーチェリーの弓を持ち上
げることさえできなくなっ
たという。メダルを目指し

例にもれず、こぞって夏を
謳歌しております。
残すところ五ヶ月。うわ
さに聞くシカゴの寒さにも
負けず、英会話にも負け
ず、アメリカンジャンク
フードにも負けず、丈夫な
体を持ち、できる限りすべ
てのことを学び自分のもの
とし、結果を出して弘前大
学にもどるべく緊蹙一番取
り組んでいきたいと思つて
おります。

て寝食を忘れ、練習に打ち
込んできたにもかかわらず、
結果が出せなくなつてしまつ
たことへの苦悩は、想像を
絶するものである。しかし
ながら、「メダル」という物
質的な目標を失うことで、
かえって精神的な重荷から
解放され、若い人達と同じ
目の高さで競い合いながら、
アーチェリーの試合を楽し
む心の余裕が再び生まれた。
これが結果的に良い成績に
つながり、四十二歳でのオ
リンピック再挑戦で銀メダ
ル、「中年の星」に輝いたと
いう。山本氏は、「引退」
という言葉を出さなかつた
が、おそらくシドニー落選
の時には、この言葉が脳裏
をよぎつたに違いない。ア
テネ・オリンピックの決勝
戦では、準決勝で山本氏に
敗れたイタリア選手の応援
団までが、氏の応援に回つ
てくれたことが、その熱い
語り口から生き生きとよみ
がえるようであつた。ス
ポーツは体力と技術力の勝
負ではあるが、メンタル面
での要素も大切だというこ
とは良く言われることであ
る。これを改めて認識する
とともに、個人的には外科
手術にも共通する面がある
と感じさせられた。現在も
現役を続け、勝負に挑み続
けている姿からは、「あ、
この人は本当にアーチェ
リーが好きなんだな」と思
わせると同時に、栄光の陰
にあつた苦闘を思い起こさ
せて、聴衆の深い感動を呼
んだ講演であつた。

ちなみに、氏の健康の秘
訣は、どんなに遅い時間
でも仕事から帰ってきたら、
一時間ランニングをするこ
とだそうである。アスリー
トならではの健康の秘訣で
はあるが、われわれにはい
ささか困難な方法でもあ

る。その後に引き続き講演
で、中路教授から、「週に
三日、短時間の運動でも続
けると効果が得られる」と
いうお話を拝聴して、「そ
れなら実行可能(?)」と
一安心。継続は力なりとい
うことか。
特別講演のあとは、中路
教授、青森県立中央病院吉

町循環器科部長、今村クリ
ニック今村院長からの講演
があり、最後は聴衆との質
疑応答があり、会の代表世
話人である神戸大学岡田昌
義名誉教授と弘前大学谷口
助教の巧みな司会で、聴衆
からはさまざまな質問が出
て、会は大いに盛り上が
つて終了した。

第2回 サイエンスカフェ 弘前

病理生命科学講座 佐藤 冬 樹

第二回サイエンスカ
フェ弘前が、平成二十一
年八月二十九日に本学
病理生命科学講座で開催
された。「サイエンスカ
フェ」とは、科学者など
の専門家と参加者がお茶
を飲みながら科学などの
話題を気軽に語り合う、
新しいコミュニケーション
の場であり、一九九七
年にヨーロッパで行わ
れたのが起源とされる。
「サイエンスカフェ」の
意義・目的は、我々の研究
内容を、一般の参加者にわ
かりやすく理解してもら
い、かつ気軽に体験して
もらうことにある。第一回
にあたる昨年度は「がん細胞
の増殖を抑える試み」、今
年度は「概日リズム、日内
リズムとは!?」をテーマと



スタッフによる実験の説明



研究のお話

し、それぞれ半日のプログ
ラムで行った。参加者は、
研究の背景や概要の説明を
受けた後に、研究室内に移
動して実際の実験操作や病
理標本の観察などを体験し
た。プログラム最後の「クッ
キータイム」では、参加者
が和やかな雰囲気の中で語
り合えたようだ。多くの
質疑応答が交わされ、最
後まで熱い「サイエンス
カフェ」となった。現在、
科学者と一般市民がその
情報をできるだけ共有
し、その利用をめぐり語
り合うことはとても重要
である。病理生命科学講
座では来年度以降も、こ
のサイエンスカフェをで
きる限り継続して行く所
存である。

三沢 air base medical group 見学報告

医学科五年 橋本知実

今回二〇〇九年七月二十五日～二〇〇九年八月一日までの期間、三沢 air base medical group にて実習をさせていただきました。初めての経験で大変貴重な体験をさせていただきましたので報告させていただきます。始めに受け入れた先の代表の先生とメールでのやりとりを開始しました。すべて英語でアメリカンカルチャーを知らない自分には、自分の書いたメールが正しいのかどうか分からないまま進んでいきました。三沢市は弘前から電車で三時間とかなり遠くにあります。三沢市は気候も弘前とは県内同士でありながら夏は弘前に比較してかなり寒かったです。防寒対策はしっかりとった方がお勧めです。

次に air base medical group の見学内容について報告させていただきます。建物は一階、地上一階部分がそれぞれの科が外来患者を受け付ける窓口になっており、夏はサマータ임을導入して私が見学したときは外来の受付は七時から十六時に終了でした。部署は Family medicine と呼ばれるものから、外科まで多岐にわたり、患者さんは軍人の方から、家族、また基地外のアメリカ国籍の軍関係者以外の方など幅広い患者さんが来ていました。見学した科について
整形外科的疾患…米軍では PT test と呼ばれる、健

三沢空軍病院での実習を終えて

医学科五年 光根 歩

二〇〇九年七月二十日から七月二十九日までの十日間、三沢空軍病院の実習に参加した。アメリカの医療を見てみたいという理由で応募したが、三沢に出发する前は多少後悔もしていた。これまで外国の人と話したことはなく、ホームステイも初めての経験。実習担当者の Dr. Wanker とメールで打ち合わせするのも一苦労で、ちゃんと会話できるかどうか心配だったのだ。十日間もやっていけるのだろうか、不安な気持ちで実習を迎えた。

しかし、いざ三沢での生活が始まると、そんな不安は消えていった。問題の英会話についてだが、速くて聞き取れない時は一語一語ゆっくり話してもらい、どのように言えばいいかわからない時は単語を羅列して対処した。初めはぎこちなかったが、徐々に言いたいことが言えるようになってきたかなという実感を持てた。

お世話になったホスト
追伸…その後ホームステイ先の方から三沢の空軍航空ショーに招かれ十月に三沢を再訪しました。クリスマスにも招かれています。

留学だより

テネシー大学及び三沢空軍病院への学生派遣

話しかけてきてくれ、沢山遊びに連れて行ってもらった。米軍基地の人は皆口を揃えて、「この自慢は人の優しさだ」と話していたが、まさにその通りだと感じた。本当に良くて頂いた。

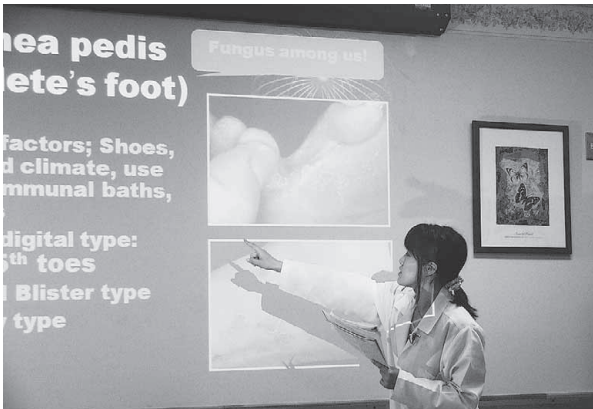
一日の生活について。朝は八時頃に病院に行き、どの科で実習するかを決める。出産だったり特別な処置がある時は、その都度呼んでもらった。午前中は比較的忙しいが、午後になると多くの科では患者が激減する。四時過ぎには皆帰り始め、自分の時間を楽しむ。毎日のようにパ

三沢空軍基地での Externship を終えて

医学科五年 大森 一乃

二〇〇九年八月二十三日から九月三日までの約二週間、夏休みを利用して三沢空軍基地病院での Externship に参加させて頂きました。基地に一度足を

踏み入れるとそこはまさに米国という感じで、ほとんど日本語を話すことなく英語漬けの日々を送ることができました。私は Family practice と UCC (Urgent care center) で主に実習をさせて頂きました。両方とも多彩な疾患を扱う科であり、Family practice では内科はもちろ



英語でのプレゼンテーション

わゆる水虫や巻き爪、ニキビ) や婦人科(特に STD) の検査や診断、治療にわたるまで一貫して行っているところが印象的でした。UCC

説明する。時には他の科の医師も加わり、患者が帰った後でも話し合っていた。全員が納得するまで何度も議論を重ねる様子が印象的だった。

十日間はあっという間に過ぎていった。毎日が楽しく充実していて、応募して良かったと心から思った。このような素晴らしい機会を与えてくださった廣田先生、Dr. Wanker をはじめとするお世話になった全ての方々に、この場を借りてお礼申し上げます。有難うございました。

では救急車で搬送されてくる患者さんだけでなく、比較的軽症と思われる虫さされや腹痛、片頭痛といった患者さんも来るため、先生方は昼食を食べる時間もないほど忙しく働いていました。実習内容としては予診や身体所見をとり、その内容をドクターに短く説明します。その後ドクターと一緒に所見を確認していくのですが、この時見逃していた所見があったりして反省しながらも学ぶことが多かったのです。患者さんが帰った後はいくつか診察中に疑問に思った点について質問したり、処置についてドクターから簡単にレクチャーがあったりして意欲的に実習に取り組むことができました。実習当初は自分の言いたいことがなかなか伝わらずもどかしい思いをすることもありましたが、病院実習を通して培った医療面接・診察手技と同じことをいつも通りすればいいのだと気付いてからはジェスチャーも交えな

がら多少自信を持つて行うことができたのではないかと思います。その他には Flight medicine という空軍パイロットの健康管理を行っている部門でパイロット用の視力や色覚の検査を実際に体験したり、OB GYN (産婦人科) の腹腔鏡の手術なども見学させて頂きました。

米国では公的な健康保険制度が十分に機能していないため、自費負担が多く減多なことがない限り病院にかからないのではと思っていたのですが、米軍基地では軍人とその家族にかかる医療費は全額軍で負担するという制度があるため、軍に勤めている方々は割と気軽に医療機関を利用しているようでした。

思いがけず米軍のテレビへの出演も果たしてしまいました。実習が始まって四日目の朝、医療安全対策室の Sayles さんに突然、大森さんにテレビの取材が来ているよ、と言われた時は驚きのあまり何が起きているのかよく分かりませんでした。あれよあれよという間に撮影は進み、三沢空軍病院の挑戦という題で弘前大学の Externship program が紹介され、診察の様子や翌日に行われたプレゼンテーションの模様などが取材されました。一分程度の CM のような番組に編集された後一定の期間中に何度も放送されていたらしく、見知らぬ病院職員の方にも早速テレビ見たよ！と話しかけて頂いて少し恥ずかしかったですが、多くの方にこの program を知って頂けてうれしかったです。

実習期間中には大規模災害(次ページへ続く)

(前ページより)

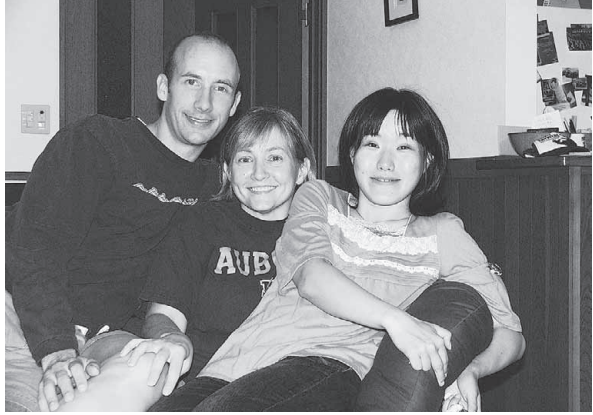
害を想定した本格的な訓練にも参加できました。実際に生物化学兵器の除染装置やトリアージの様子を間近で見ることができ、とても興奮しました。人的、自然災害に備えて三沢空軍基地では年に二、三回訓練を行っており、その機会に立ち会うことができて非常に貴重な体験になりました。

休日にはホームステイ先の Bucklew 夫妻と三沢の花火大会を見に行ったり、バーベキューをしたり、航空科学博物館に連れて行ってもらったりと楽しく過ごしました。留学やホームステイの経験もない私でしたが、Bucklew 夫妻は家族の一員のようにとても優しく親切に接して下さり、私も自分の家のようにリラックス

クスして過ごすことができました。

この実習を通して米国の医療に触れて、英語でのコミュニケーションが上達していくのを実感し、医学英語に慣れ親しむことができて自分の中で言語の壁がぐっと低くなり米国の医療がより身近なものに感じられました。

最後になりましたが、このような素晴らしい機会を与えて下さった弘前大学医学部医学科の廣田先生を始め教職員の先生方、事務の職員の方々、そして



ホームステイ先の家族と

三沢空軍病院の Dr. Walker を始めとするスタッフの方々、ホームステイを受けて下さった Bucklew 夫妻に心からの感謝を申し上げます。

テネシー大学メンフィス校での見学体験記

医学科五年 村上祐介

私は、このたび幸運にもテネシー大学との交換学生として機会を授かりましたので、その貴重な経験を報告させていただきます。

八月二十三日、テネシー州メンフィス国際空港に到着後、早速、大学キャンパス内を散策し、医歯薬の教育研究施設や各種病院が集めた一つの「街」に驚いた。翌日から二週間で「家庭医学科」、「ER科」、「内科」、「内分泌科」、そして「アレルギー・免疫科」をローテーションした。紙面の都合上、特に最初の三科についてご紹介する。

ことをしていて、どう考えた、最終的に専門医になるのは、アメリカの場合は卒後四年、日本では卒後六年。どちらも大学入学時から合計十二年という時間で変わりはありません。

という訳で、アメリカの学生の方が優れているかどうかはシステムの違いがあるので判断は難しいですが、今回の研修で彼らと接することができたことは非常に刺激的で有意義でした。

将来、国際的な立場で彼らと discussion し、より良い医療を求めているかという点で、形式上では同学年に相当する人たちが、今どんな

実習（一般内科）で一緒に回った医学生と。
(@ Cafeteria)

最後にこの素晴らしい機会を与えて下さった廣田教授を始め、関係する先生方、また学務の方に深く感謝致します。これから、日米の医療の比較、より良い日本の医療を求めていく旅は続くとは思いますが、このような旅路につくことができたことも皆様のおかげであると思います。今後もこのような貴重な研修が続いていく事を願っています。ありがとうございます。

た「家庭医学科」では、病院に患者さんが、それこそ家族でやってくる。民間保険加入者はこのように気軽に病院を受診できるが、無保険者はできない。一方、開業家庭医 Dr. Warren に一日密着した。朝から数件の老人ホーム等の施設を駆け回り、診察や投薬指示を出していた。私は将来、Generalist になりたいが、その秘訣は何かと尋ねた。曰く、「患者さんの傾聴、患者さんとの会話、そして医療経済も含めた医療のシステムの理解。そして、救急医療（ER）も、外科的手技も基礎的なことは会得



Dr. Warren と

研修医や指導医が常に傍で教育していた。受け持ち患者さんに、診察、診断、検査、投薬指示など、指導医のチェックや指導の下、自身で一連の医療行為をしていた。早い時期からの実践経験を積み重ねるプログラムに羨ましさを感じた。学生と指導医とのやり取りを見てみると、いわゆる「see one, do one, teach one」型の教育指導方針が徹底していた。学生が指導医から学ぶのは当然だが、その逆も成り立っていた。このような双方向性の教育型が日本でも広がればと思った。米国（英国・豪も）で医師になるには、医学以外の分野で大学を卒業後、すなわち学士を取得して、「医学校」へ入学する必要があります。米医学生は皆曰く、「一度大学を卒業する必要性を感じなく、時間の無駄だ」と。自身の人生・経験を生かす努力をし

ない「モットー」に。このことに気づくにはもう少し時間が必要と感じた。彼らは、大学近くのダウンタウンへ食事や観光に連れていってくれた。メンフィス名物のボークリブ BBQ やソウル音楽とビールとの組み合わせは最高だった。こうして、二週間の見学はあっという間に過ぎ、毎日新しい何かを発見することができた。後輩の皆様も、ぜひ本プログラムへ積極的に参加することをお勧めしたい。

最後になりましたが、今回の貴重な機会を与えて下さった国際交流研究委員会、特に委員長の高橋教授・廣田和美先生、そして、諸連絡など細かい配慮をいただいた事務部・工藤さん、心より感謝いたします。ありがとうございます。

メンフィスでの病院実習を終えて

医学科五年 山本洋平

夏期研修プログラムとして、米国で病院実習をする機会を頂き、二〇〇九年八月二十四日より九月四日までの約二週間、アメリカのテネシー州メンフィスにある The University of Tennessee Health Science Center で研修をして参りました。振り返れば、アメリカの医療を直接見て体験することができ、医学の習得に対してより意欲的になったことが、今回の最も大きな収穫であったと思います。

では、アメリカの医療は実際どうであったのか。医療保険などの医療 System と文化、国土の広さの違いから、図書館が全体および各科ごとに存在するなど優れた教育環境が存在します。現地の医学生も勤勉で、優秀で、日本の初期研修医が行うようなことを毎日行っていました。科によっても違うのですが、例えば、研修医の監督下ですが、産科の二ヶ月の実習の間に医学生が三十〜四十のお産を担当します。しかし、一度大学を出ている彼らにとって医学部三・四年生は、最初の大学に入ってから七・八年目で、年数からいうと日本での初期研修に相当します。そして実際

に産科以外の科でも医学部三・四年生が求められていることは、日本での初期研修で求められていることに近かったと思います。また、最終的に専門医になるのは、アメリカの場合は卒後四年、日本では卒後六年。どちらも大学入学時から合計十二年という時間で変わりはありません。

という訳で、アメリカの学生の方が優れているかどうかはシステムの違いがあるので判断は難しいですが、今回の研修で彼らと接することができたことは非常に刺激的で有意義でした。

将来、国際的な立場で彼らと discussion し、より良い医療を求めているかという点で、形式上では同学年に相当する人たちが、今どんな

いう点においても、非常に良い経験になったと思います。最後にこの素晴らしい機会を与えて下さった廣田教授を始め、関係する先生方、また学務の方に深く感謝致します。これから、日米の医療の比較、より良い日本の医療を求めていく旅は続くとは思いますが、このような旅路につくことができたことも皆様のおかげであると思います。今後もこのような貴重な研修が続いていく事を願っています。ありがとうございます。

コラム

医学部こぼれ話...

十一月以降、医学部学生にも、ぼつぼつと新型インフルエンザの欠席がでているが、一学年あたり多い時期で二〜三名ほどで、まだ欠席多数とはなっていない。今年度は、このような欠席者を補習、レポート等で救済措置をする必要がある。インフルエンザによる欠席が今年度特に多いのかどうかは、はっきりしないよう

だ。ひとつには、発熱しても、例年であれば学生がかならずしもインフルエンザの検査をしない、季節性インフルエンザでは救済措置はないという要因が大きい。中には、いざで検査に行つてインフルエンザ陰性の結果に、出席しないと（単位が）あぶないという危機感を持つ学生が出そうである。

第52回東医体、空手道男子優勝で総合9連覇！ 剣道男子団体、個人陸上でも優勝、 個人水泳では3個の大会新で優勝！

分子生体防御学講座 教授 伊 東 健

本年の七月から八月にかけて山形大学の主管で行われた第五十二回東日本医科学学生総合体育大会夏季大会において、弘前大学学生は日頃の練習成果を存分に発揮し、男女総合で第六位と健闘した。今後ともスポーツと医学の習得を両立させて一層の活躍を期待したい。そしてまた周囲にも元気を与えてくれることを期待したい。連絡のあったものについてのみ、結果を以下に掲げる。

- 成績(連絡のあったもののみ)
- 【陸上競技部】一〇〇M H／二位：四條泰陽、走幅跳／一位：小玉祐三、三〇〇M／三位：多和田有紀
- 【準硬式野球部】途中敗退
- 【硬式テニス部】男子団体／途中敗退、女子団体／途中敗退
- 【軟式テニス部】男子団体／途中敗退、男子個人：萩原・新井ペア／ベスト16、女子団体／五位、女子個人：大森ペア／三位
- 【卓球部】男子団体／途中敗退、女子団体／途中敗退
- 【バレーボール部】男子／四位、女子／ベスト8
- 【バドミントン部】男子シングルス／ベスト8、小林雄太、男子ダブルス／ベスト8、小林・立石ペア、女子団体／三位、女子シングルス／三位：四茂野恵奈、ベスト8／追切裕江、女子ダブルス／三位：四茂野・追切ペア
- 【サッカー部】途中敗退
- 【バスケットボール部】男子／ベスト16、女子／ベスト16
- 【柔道部】個人戦、超重量級／途中敗退、洲之上康平、無差別級／途中敗退：土屋純一郎
- 【剣道部】男子団体／一位、男子個人／三位：鹿島康弘
- 【弓道部】個人／8射5中(入賞ならず)、崎尾亮太郎、団体／20射9中(入賞ならず)
- 【空手道】男子総合／一位、【団体】男子(組み手)／一位、男子(型)／一位、個人男子(組み手)／二位：内田康幸、三位：小渡亮介、男子(型)／一位：小渡亮介、女子(型)／三位：小林麻美
- 【水泳部】男子二〇〇m自由形／七位：村井康久、男子四〇〇m自由形／七位：村井康久、男子二〇〇m背泳ぎ／七位：谷聡二、女子総合／六位、女子二〇〇m個人メドレー／一位(大会新)：高橋杏奈、女子一〇〇m平泳ぎ／一位(大会新)：高橋杏奈、女子五〇〇mバタフライ／一位(大会新)：須藤舞香、女子一〇〇m自由形／二位：須藤舞香
- 【ゴルフ部】男子団体／四位、女子団体／七位
- 【ラグビー部】ベスト8

- 大会本部から届いた総合成績(男女総合) 順位「得点」学校名
- 1 「六十四・五」 慶応義塾大学
- 2 「五十六」 新潟大学
- 3 「五十四・五」 山形大学
- 4 「四十三・五」 山梨大学
- 5 「四十一・五」 弘前大学
- 6 「三十四・五」 筑波大学
- 7 「三十二・五」 山形大学
- 8 「三十一」 筑波大学
- 9 「三十一」 獨協医科大学
- 10 「二十五・五」 日本大学
- 11 「十三・五」 新潟大学
- 12 「十三・五」 弘前大学

- 《第五十一回(平成二十年)度》東医体夏季総合成績
- 【男子総合】
- 1 「八十二」 慶応義塾大学
- 2 「五十四・五」 山梨大学
- 3 「四十四」 順天堂大学
- 4 「四十一・五」 旭川医科大学
- 【女子】
- 1 「三十九」 東京女子医科大学
- 2 「三十一・五」 筑波大学
- 3 「十九・五」 旭川医科大学
- 4 「十九・五」 北海道大学
- 5 「十八・五」 千葉大学
- 6 「十五・五」 弘前大学
- 【冬期部門】
- 【スキー部】女子
- アルペンSG／二位：瀬川千紘
- アルペンGS／二位：瀬川千紘
- アルペンSL／四位：瀬川千紘



今年も十月二十三日(金)から二十五日(日)の三日間、総勢六十四名の学生が参加して、総合文化祭において「医学展」を行いました！医学展では、私たち学生が授業で学んできた知識をもとに展示物の企画・製作を行います。そのさい、特に心がけているのは、ご来場者にとって有用な情報を提供し、かつ大人から子どもまで楽しめる展示を作ることです。もちろん、参加する学生自身が医学知識を深め、達成感を得られるのも、医学展の醍醐味の一つです。

「治療手技コーナー」(班長・四年阿部皓太郎)では、脳動脈瘤コイル塞栓術体験、腹腔鏡を使った遊び、そして外科結びの実演を行いました。このコーナーは、本格的な練習機器を用いつつも、小さな子どもも楽しめるものであるため、親子連れの方を中心に、体験希望者が絶えませんでした。「臓器展示コーナー」(班長・三年伊沢和洋)では、正常臓器および骨標本、病理標本、それから学生のスケッチを展示しました。アンケートには「本物の臓器、骨を見られてとても勉強になり、驚きました」との声が多く、ご来場者にとって実物の臓器を見ることが、とてもインパクトがあることなのだと改めて感じました。



「治療手技コーナー」(班長・四年阿部皓太郎)では、脳動脈瘤コイル塞栓術体験、腹腔鏡を使った遊び、そして外科結びの実演を行いました。

「精神医学コーナー」(班長・四年齊藤陽子)では、パソコンを使って一週間の感情の浮き沈みのチェック(POMS)、性格チェック(TEG)を行えるのが目玉でした。ポスター作りにも力を入れ、多くの学生が力を合わせて完成させた展示でした。「感染症コーナー」(班長・四年斎藤純介)では、注目度の高い感染症であるインフルエンザ、麻疹、結核等のポスター展示とともに、新型インフルエンザ関連の報道の切り抜きのスクラップを作るなど、早くから展示の準備を進めてきました。寄生虫の標本展示も行いましたが、「キモチワルイ」という声をあげながらも、興味津々で見ている方が多かったのが印象的でした。「社会医学コーナー」(班長・四年山戸和貴)では、社会医学講座から四肢血圧計、体組成計、骨密度計を拝借して、ご来場者の健康チェックを行いました。また今年は、医療機関で実際に使っている機器を使って、喫煙者の呼気中のCO濃度を測定する試みも新たに行いました。喫煙の程度がデータとしてその場でわかるため、ご自分の健康をふり返るよいきっかけになっていたようです。

また、今年も学術文化祭「知の創造」との共同企画を行い、感染生体防御学講座の中根明夫先生に「新型インフルエンザ」について、腫瘍内科学講座の西條康夫先生に「最新のがん医療」についてご講演していただきました。新型インフルエンザが非常にタイムリーなトピックであったことと、一般の方の癌への関心の高さから、講演会には両日ともたくさんのご来場者にお越しいただき、多くの質問が活発に飛びかうものとなりました。



青森では毎年九月に青森県民駅伝という市町村対抗の駅伝大会が青森市で行われています。テレビで生放送されているので知っている方もいるかと思いますが、第十七回目の今年は九月六日に行われ私は出身地である深浦町の選手として出場してきました。中学生のときから参加しているのですが、今年が十一回目の出場となりました。「健脚でつなげ郷土の和と心」のスローガンのもと約三十四キロを八人で走る大会です。この大会のおもしろいところは様々な職業や年齢のランナーがたくさん出場していることと箱根駅伝出場者、国体チャンピオン、元実業団選手など日本のトップで戦っている選手もいれば、仕事の合間に趣味で走っている

県民駅伝

医学科六年 佐藤 諭

人やかなかには健康維持のため町中をジョギングしていたらスカウトされ出場してしまったという方もいます。そんな様々な人達が「郷土のために」と必死に走ることは普段記録や趣味のために走っている私たちランナーには大きな感動と喜びをもたらしてくれます。

中学卒業後地元を離れ弘前の高校に入學し下宿生活を始め、それ以来九年弘前で暮らしているためこの県民駅伝という大会は故郷である深浦町と関われる数少ない機会となり、例え選手に選ばれなくても毎年参加するようにしてきました。

さすがに大学受験を控えた高校三年次や試験期間の真只中だった大学四年のときは結果を出せませんでした。が、実習中だった五年次では実習先の先生方や入院中の患者さんが応援してくれ大変うれしかったです。地元の人達も「地元を知っている人が走るから」と例えてテレビにほとんど映らなくても最後まで観戦してくれ

今年も実習や東医体が終わって国家試験の勉強中での出場でもありませんが、事務の方々、鵬桜会の皆様にご協力して下さいます。医学展を通じて、私たち学生は互いに協力し合って何かを作り上げる楽しさや、多くの市民の方たちと触れ合う喜びを感じることができました。ご指導いただき、本当にありがとうございました。



昨年アップルマラソンで優勝してから早一年、私はこの第二の故郷で二連覇をさせていただきました。昨年はがむしゃらに練習して、勝ち取った優勝でした。ただこの一年は思ったようにはいきませんでしたが、昨年のレース後に決めた「三時間切り」の目標を冬の県外のレースで達成してしまい、気持ちが燃え尽きてしまいました。さらに今年は昨年からの病院実習が七月まで続き、それを言い訳に「これからは楽しく走る程度にしよう」と逃げそうになったこともありましたが、しかし、もともと走ることは大好きなので実習や勉強の合間に走るとつい夢中になっていました。そんな中、今年もアップルマラソンの登録用紙が届きました。優勝した時の感動がよみがえり、もう一度あの感動を味わいたいという



アップルマラソン 二連覇

医学部医学科六年 多和田 有紀

気持ちがあき上げ、昨年と同じフルマラソンにエントリーすることにしました。やるからには中途半端にはできない性格なので、それからは時間を見つけては走るといふ生活を続けていました。部活の仲間もたくさん一緒に走ってくれました。それでも、レースが近付くにつれ、昨年に比べ練習をしないという不安や、周りから様々なプレッシャーもあり、出場を断念しようかと思った時期もありました。そんなとき病院の先生方や友人、また部活の仲間や遠く離れた家族からの激励があり気持ちを繋ぐことができました。特に家族からの応援は一番心強いものでした。

レース当日はあいにく雨がぱらついていました。私は雨が苦手で、天に見放された気分でした。スタートから二十キロまでは女子先頭選手と並走していましたが、折り返し後に一気にスピードが上がり、これまで引いてしまっていた。ただここまで来たなら、諦めるわけにはいきません。ひたすら我慢の走りをしていくと、なんと雨が止んだのです。その

後徐々にペースアップし残り四キロ地点でついに先頭に追い付くことができました。ちょうどその地点にはハーフマラソンを走り終えた部活の仲間が応援に来てくれていました。それが大きな励みになりラストスパート。ゴール付近では多くの友人や部活の仲間が声をかけてくれました。その結果、三時間切りとはいきませんが、昨年の記録を上回るタイムで優勝することができました。

今回の優勝は周りの方々が温かく声援を送ってくれたことが最大の勝因だと考えています。これから二月の国家試験、そしてこれからの医師生活へ向けて頑張ります!!

弘前大学医学部 臨床教授・臨床准教授 称号付与者

臨床教授

- 佐藤 秀平 (青森県立中央病院総合周産期母子医療センター長) 平成二十一年九月十八日〜平成二十四年九月十七日
- 高橋 秀身 (大館市立総合病院副院長) 平成二十一年十月一日〜平成二十四年九月三十日
- 安保 亘 (青森県立中央病院小児科部長) 平成二十一年十月一日〜平成二十四年九月三十日
- 坂井 哲博 (むつ総合病院副院長) 平成二十一年十月一日〜平成二十四年九月三十日
- 高橋 伸也 (青森市立青森市民病院泌尿器科部長) 平成二十一年十月一日〜平成二十四年九月三十日

臨床准教授

- 柳沢 健 (青森労災病院泌尿器科部長) 平成二十一年十月一日〜平成二十四年九月三十日
- 吉川 和暁 (むつ総合病院泌尿器科部長) 平成二十一年十月一日〜平成二十四年九月三十日
- 中村 秀雄 (むつ総合病院眼科部長) 平成二十一年十月一日〜平成二十四年九月三十日
- 金城 学 (青森労災病院小児科部長) 平成二十一年十月一日〜平成二十四年九月三十日
- 北澤 淳一 (黒石市国民健康保険黒石病院医療局長) 平成二十一年十月一日〜平成二十四年九月三十日
- 池田 保彦 (青森市立青森市民病院小児科部長) 平成二十一年十月一日〜平成二十四年九月三十日
- 市瀬 広太 (青森市立青森市民病院小児科部長) 平成二十一年十月一日〜平成二十四年九月三十日
- 中畑 徹 (むつ総合病院小児科部長・新生児治療部長) 平成二十一年十月一日〜平成二十四年九月三十日
- 葛西 幹雄 (弘前市立病院小児科部長) 平成二十一年十月一日〜平成二十四年九月三十日

人事異動

●大学院医学研究科

- 採用 (21・10・1) 生体構造医科学講座 助教 谷 利樹 (理化学研究所脳科学総合研究センター)
- 昇任 (21・10・1) 分子病態病理学講座 講師 水上 浩哉 (分子病態病理学講座助教)

- 脳神経生理学講座 講師 山田 順子 (脳神経生理学講座助教)
- 採用 (21・10・17) 麻酔科学講座 助教 丹羽 英智 (附属病院病院助手)
- 研究休職 (21・10・17) 麻酔科学講座 助教 遠瀬 龍二
- 併任 (21・10・22) 糖鎖医学講座 教授 中村 敏也
- 糖鎖医学講座 准教授 吉原 秀一

社団法人 青森医学振興会

沿革 平成11年3月1日 弘前大学医学部医学科後援会鵬校医学振興会発足(任意団体)
平成13年4月2日 社団法人青森医学振興会設立許可(青森県)

- 振興会では、21世紀の青森県の医学・医療を積極的に支援しようとする事業を行っております。
- 医学教育の助成 教育活動を活性化するための支援
 - 医学研究の助成 研究活動を高度化するための支援
 - 地域医療振興事業の助成 地域医療に貢献するための支援
 - 医学国際交流の助成 国際学術交流の支援

随時、会員の募集とご寄附の受付をしております。
会費と寄附金の納入方法は下記の通りです。

社団法人 青森医学振興会			
口座名	青森銀行 弘前支店	普通 1087485	※ 各銀行の本支店及び
	みちのく銀行 大学病院前支店	普通 0198579	ゆうちょ銀行から振込む
	ゆうちょ銀行振替(旧郵便振替)	02200-4-57580	場合は、手数料無料です。
会費	会員種別	年会費	お振り込みいただく場合は、 お手数ですが、振興会事務局まで ご連絡(電話、メール)願います。
	医学部教員	1万円	
	医学部卒業生	2万円	
	賛同する個人 賛同する団体	1万円 10万円	

お問い合わせ TEL:0172(33)5111内線6519 E-mail:jm6519@cc.hirosaki-u.ac.jp

弘前大学 後援会のご案内

弘前大学後援会では、学生の学業、課外活動への助成、学生の進路指導に必要な助成等学生生活の多岐にわたる分野の助成を行っております。つきましては、何卒本会の趣旨に御賛同頂きまして、各位の格別の御高配、御

支援を賜りますよう、切にお願い申し上げます。
なお、入会方法等の詳細については、弘前大学総務部総務課広報・支援グループ(Tel:0172-39-3012 E-mail:jm3012@cc.hirosaki-u.ac.jp)までご連絡いただくか、弘前大学後援会ホームページ(http://www.hirosaki-u.ac.jp/kouen/index.html)をご覧ください。

- 採用 (21・11・1) 脳神経外科学講座 助教 伊藤 勝博(青森市民病院)

●医学部附属病院

- 辞職 (21・9・30) 総合診療部 講師 大串 和久 (松浦市立中央診療所)
- 泌尿器科 助教 岩渕 郁哉 (青森県立中央病院)
- 採用 (21・10・1) 泌尿器科 助教 立和田得志(医員) 併任 (21・10・1) 副病院長 福田 幾夫

編集後記

先日、英国 Oxford に Br J Anaesth の編集会議出席のため出張した。Oxford に行く前に、以前留学していた Leicester 大学に立ち寄った。英国では大学改革が行われ、Leicester 大学でも二〇〇三年八月に大再編があり、医学部の全講座は Cancer Studies & Molecular Medicine, Cardiovascular Science, Health Science, Infection, Immunity & Inflammation, Medical and Social Care Education の五講座に統合された。講座員はようになったかというところ、例えば麻酔科学講座は研究診療内容により Cancer Studies & Molecular Medicine, Cardiovascular Science, Health Science の三講座に分散した。そして旧臨床講座は、十一の Clinical Division に再編され講座の下部組織となった。麻酔科学講座は、臨床に關しては Clinical Division of Anaesthesia, Critical Care

and Pain Management となったが、以前の講座費に相当するような費用は Clinical Division にはほとんどなくなった。講座員の所属は三講座に分散したものの、部屋や机は Clinical Division of Anaesthesia, Critical Care and Pain Management と名前の変わった旧講座の場所をそのまま使うという非常に変則的なシステムだ。Clinical Division という診療科を想像するが、英国では附属病院は NHS (日本では言えば厚生局) 管轄で、診療科はそこにあり、講座教授とは別に診療科長が存在する。よって、Clinical Division は医学部内の診療科と連携して診療、教育をするといった感じである。以前の主任教授は Clinical Division のトップではあるが、講座の主任教授ではなく、講座はバラバラな雰囲気であった。勿論、教授であるので、患者さんや職員からは尊敬はされているものの、権限がかなり縮小した感否めない。日本は民主党政権になり党幹部が英国に訪問し、英国のシステムを学んでいるようなので、民主党の大学改革で日本の大学も英国のようになるかも知れない。これとは別に以前から道州制の話があり、近い将来大学再編は避けて通れないであろう。地方大学は、今までは改革の度に煮え湯を飲まされてきた。今度の新政権には、英国のような財政的に合理的なものではなく、頑張り報いてくれて地方大学を活性化させるような改革を望みたいものである。(廣田 記)